

川村 英司

レクチュア・コンサート

2006 - 2007年度 第 4 回
2007年7月31日(火) 18時30分 より
於:Studio Virtuosi

Johannes Brahms 作曲 "Lieder und Gesänge" (3)

ブラームスの「歌曲」(3)

バリトン: 川村 英司
ピアノ: 小林 秋恵

今日はブラームスの「歌曲」(3)として前回取り上げた作品 49「5つの歌曲」 „Fünf Lieder“ のつづきを話します。

作品 49 の後の歌曲は作品 57 „Acht Lieder und Gesänge“ で Georg Friedrich Daumer(1800 - 1875) の „Frauenbild und Huldigungen“ から選んだ詩が 1, 4, 5, 6, 8 の 5 曲で、そのほかは 2 番目が Hafis(1326 年頃 - 90) その他はイタリアとインドの民謡をダウマーが翻訳した詩です。 作品 58 も „Acht Lieder und Gesänge“ で、作品 59 も „Acht Lieder und Gesänge“ で、次の歌曲は作品 63 の „Neun Lieder und Gesänge“ で、作品 69 は „Neun Gesänge“ で、作品 70 は „Vier Gesänge“ で、次は作品 71 „Fünf Gesänge“、作品 72 „Fünf Gesänge“ と続き、次は作品 84 に飛び、 „Fünf Romanzen und Lieder“ になります。

以前にも話をしたと思いますが、ブラームスの歌曲のタイトルで、 „Lieder und Gesänge“ とか „Gesänge“ と言うのが殆どですが、ブラームスが意図している Lieder とは単純なメロディーで有節歌曲であることが条件のようで、通作形式の歌曲は Gesänge と名付けたようです。日本語だとどちらも「歌」ですが、ドイツ語だと „Weise“, „Lieder“, „Gesänge“ それぞれの意味しているところには違いがあるのです。

作品 49 以降から作品 84 までの間に発表された作品で声楽関係の主なものは作品 52 の „Liebeslieder“ (ピアノ連弾の伴奏で歌う四重唱曲、全 18 曲)、この曲は 5 年後に歌無しのピアノ連弾に改作したものが作品 52a として出版されています。その他に所謂「アルトラプソディー」として有名な作品 53、オーケストラと合唱の「運命の歌」作品 54 と作品 55 「勝利の歌」があり、作品 61 「四つの二重唱」、作品 62 「7つの歌」(混声合唱曲)、作品 64 「三つの四重唱」、作品 65 „Neue Liebeslieder“ (新 愛の歌、ピアノ連弾の伴奏で歌う四重唱曲、全 15 曲)、作品 66 「五つの二重唱」、作品 82 „Nänie“ (合唱とオーケストラ) などがあります。その他には作品 68 交響曲第 1 番、作品 73 交響曲第 2 番、作品 77 ヴァイオリン協奏曲 D-Dur、作品 78 ヴァイオリンソナタ第 1 番、その他にピアノ曲、序曲などがあります。それらの詳細をお調べになりたいお方は Henle 社から出版されている、 „Johannes Brahms Thematisch-Bibliographisches Werkverzeichnis von Margritt L. McCorkle“ (参考資料 1) を参照してください。

前置きはこのくらいにして本題に入ります。

作品 57 「8つの歌」からは 2 曲目の „Wenn du nur zuweilen lächelst“ を歌います。

この詩はダウマーが翻訳した „Polydora, ein weltpoetisches Liederbuch“ (ポリドーラ、世界の詩を集めた歌の本) (参考資料 2) と題した詩集からブラームスを選びました。

この詩は 1326 年頃 - 90 ; ペルシャの抒情詩人ハーフィスの詩を翻訳したものです。

統計は取っていませんが、ブラームスはダウマーの詩やダウマーの翻訳詩に結構作曲したように僕は感じています。現在のイランという言い方と昔の呼び方「ペルシャ」では我々の受け止め方はどう違うのでしょうか？回教徒の国は色々あり、いろいろな問題も抱えているのですが、僕が音楽を通して感じる「ペルシャ」は結構情熱的で心がとても開放されているように感じます。前回歌った „Botschaft“ も前々回歌った „Wie bist du, meine Königin“ も同じくハーフィスの詩（ダウマー訳）です。女性にはヴェールを被せて、他人の男性には顔すら見せない国の男性が、こんなに激しく女性を口説くとは、と少々不思議な気がします、それは僕だけの偏見でしょうか？それとも時代によって色々違ったのでしょうか？

Wenn du nur zuweilen lächelst,
Nur zuweilen Kühle fächerst
Dieser ungemessenen Glut,
In Geduld will ich mich fassen
Und dich alles treiben lassen,
Was der Liebe wehe tut.

君が時折微笑んでくれさえしたら、
時には涼風を送ってくれさえしたなら
この激しい情熱に
僕は何事も耐え忍んで
全て君のなすがままに任せよう
この愛情に苦痛を与えることでも。

上辺だけで歌うと綺麗な、優しい歌に聞こえますし、ただ綺麗に甘く歌っている人もいます。しかしこの詩の内容は結構激しいと思うのですが、この詩を読まれて、皆さんはどう感じますか？

Dieser ungemessenen Glut, (この激しい情熱に)、Was der Liebe wehe tut. (この愛情に苦痛を与えることでも) を二度繰り返して激しさ、苦痛を訴えています。最初の 2 行の言葉でも、言葉の裏にある感情をどの程度秘めておくかで、表現はおのずと違ってくると思います。

捉え方でどのように違った表現が出来るか、歌い比べてみようと思います。

実は 7 月 19 日に札幌で発声講座 (1) をしてきました。計画としては、北海道フーゴー・ヴォルフ協会の会員のために参考になるのならばと身内で話をするにしていたのですが、新聞記者の知る所となり、「声帯に無理をかけない歌唱法を教える講座『声の出し方について考えましょう』が 19 日午後 7 時から札幌市西区宮の沢 1 の 1 の市生涯学習センターチエリアで行われる。」と 17 日の新聞に掲載されると、問い合わせの電話で連絡係りの人はてんやわんやだったそうで、40 数人の部外者が出席してくれました。最後に 1 曲シューベルトを歌い、同じ曲を部分的に押さえるとこんな声、表現になりますと言って、所謂団子声 (クネーデル) の押さえた声で歌ってみました。聴いていた生徒さんが感想として「押さえると声が一色になるだけでなく、言葉が殆ど聞き取れなくなった。」と言われました。言葉が聞き取れなくなる事はあまり考えていなかっただけに驚きました。

その事で、発音が非常に不明瞭な日本人歌手の原因が分かったような気がしました。団子声は音色、表現に変化がでないだけではなく、発音、言葉の表現に致命的に悪影響を及ぼすようです。

一寸だけ押さえた、団子声 (Knödel) で歌ってみます。どんな感じがしますか？日本の声楽教師の殆どはクネーデルが良い声だと思っている節があり、生徒に教え込んでいるのです。コンクールの審査員も同様です。

話を元に戻します。

勿論もっともっと激しい情熱的な内容の詩は幾らでもありますが。イタリア語でもスペイン語でも、あらゆる言葉でこのような激しい感情を表した詩があるから、作曲家もその詩に触発されて歌を作曲するのでしょうか。詩人がどのように、何を感じて詩作したか、作曲家がどのような感情を想像し、考えて作曲したのかを想像する楽しみが我々に与えられたものです。

ドイツ歌曲は哲学だ！と言われる日本の音楽関係者がたくさんおられると思いますが、僕は哲学があるとすると恋愛哲学だ！と極言する理由は、歌曲 (全ての国の) の殆どの詩は恋愛詩だと思うからです。勿論詩の内容は多岐にわたっており、宗教詩、教訓詩、自然を歌った詩、風刺をした詩など色々

ありますが、恋愛詩を除けば残りの詩は何%に減ってしまうのでしょうか？いずれにしろ、それぞれの詩の持つ意味を的確に、忠実に表現することが我々の役目だと思っています。

話は少し飛びますが、声楽を一寸齧った人なら殆ど誰でも知っているイタリア歌曲を一曲歌います。詩の意味は下記に書いたとおりですが、この詩をいとも単純に感情を込めずに歌っている初心者は殆ど 90%以上でしょう。声だけ出れば良いと思って教えている先生も 90%以上だと僕は思っています。音大の受験生が選んだ自由曲を考えてみれば、如何に非常識が蔓延しているか一目瞭然です。

まず皆さんの耳慣れたパリゾッティ版（参考資料 3）とイエッペセン版（参考資料 4）を聴き比べてください。パリゾッティ版はパリゾッティがローマン派の伴奏に編曲したのに対して、（メロディーも彼の趣味で色々装飾をしています。）イエッペセン版は古典の形式にのっとり伴奏を作り上げていると言われますが、皆様はどちらがお好みでしょう。しかもパリゾッティは 1 番を 2 度繰り返すことになっていて、2 番の歌詞は印刷されていません。

O cessate di piagarmi, O lasciatemi morir. Luci ingrante – dispietate Più del gelo, piu dei marmi fredde e sorde ai miei martir.	私を傷つけるのを止めるか さもなくば私を死なせてほしい。 氷よりも大理石の像よりも冷たくて 私の苦悩には耳も貸さない 無慈悲で情け知らずの目よ。
--	--

Più d'un angue, più d'un aspe Crudi e sordi a miei sospir, occhi atroci, orgogliosi, voi potete risanarmi e gotete al mio languir.	私の溜息に対して 毒蛇よりもむごく耳を貸さない 残忍で傲慢な目よ お前は私を癒すことが出来るのに 私が寔れはてるのを楽しんでいる。
--	---

イタリア語の詩ですが、この詩を読んで僕の歌を聴いてください。初心者は詩の意味を感じずに、ただ綺麗に歌うことで、生徒も先生も満足しているのが日本での殆どの声楽教育でしょう。詩の持つ意味とは全く関係のない声で、ただ表面面を綺麗に歌えばイタリア歌曲の勉強をしたと思うのが、日本の現状なのです。無意味な声を出すことから始まる日本の声楽教育に警鐘を鳴らし続けたいです。

しかも我々の時代の何十倍も声楽学生が毎年卒業しているのです。おまけにほぼ全員が教員免許証をもらっているのです。

3 番目の歌が „Es träumte mir“ です。この詩はダウマーが翻訳した詩集 Polydora のスペインの民謡 12 篇のうちの 8 番目の詩です。ダウマーの詩に作曲した作曲家がどれほど多いのか残念ながら知りませんが、ブラームスは結構な数の詩に作曲しています。

Es träumte mir, ich sei dir teuer; Doch zu erwachen bedurft ich kaum. Denn schon im Traume bereits empfand ich, Es sei ein Traum, es sei ein Traum.	僕は君と親しくなった夢を見た、 しかし目を覚ます必要はまずなかった。 なぜなら既に夢の中で既に感じていた、 それは夢だ、夢なのだと言うことを。
--	--

この歌も捕らえ方でいろいろに歌えるでしょう。片思いの切なさが、ひしひしと伝わってきます。我々が表現しなければならぬ感情、状況、場面など想像力を豊かにしなければ到底表現できません。若い頃は良く想像力か、経験か、どちらが大切かと議論したものです。この曲も表面的に綺麗に歌うと、このように歌えると思います。

別に音楽家だけでなく、どの分野でも同じ議論がされているでしょう。小説家、詩人、画家、俳優など、創造的な仕事をする人々の間では言われ続けていることでしょう。しかし我々が経験できるのは非常に狭い範囲でしかありません。殆どは想像の世界なのです。その想像力を高めること、良い演奏をたくさん聴くことが我々の勉強なのです。

8番目の歌が „Unbewegte laue Luft“ です。6月28日のリサイタルでも歌いましたし、今までに何度も歌っていますので、皆さんも良く知っておられるでしょうが、このような小さいホールで聴かれることは皆さんにはないと思いますので再度取り上げました。ダウマーの詩ですが、ハーフィスの詩の翻訳を読んでいる様な感じさえします。恋愛詩は全部そうだ、同じようなものだと言えばそれまでですが、何か秘められた激しさ、煮えたぎるような情熱のほとぼしる様、夜の静寂、静まり返った自然と愛し合う男女の心に秘められた情熱の表現が若い頃の僕の歌には声の若さとともに共感できるものが多かったと思います。

この歳になってもこの歌を歌うときの心、気持ちは変わってはいないと思うのですが、呼吸の問題は多少あります。若い時に一息でうたって当たり前だったものが、歳を取るとやはり歌いきれなくなっているようです。息を吸おうと思わなくても出来ていたことが、良く吸わなければと気をつけなければ出来ないのです。最近の僕の楽譜には息をちゃんと吸うようにという印が入るようになりました。吸い忘れが多いのです。おまけに慌てて息を吸うと気管に巢食っている痰が移動をして咳が出るという悪循環が起こります。かつてはなかった事です。老化現象の一つです。気管支を痛めて1年以上も治らないのですから。

かつて、1964年の夏風邪で痛めた気管支が半年以上治らなく、ムーアさんの伴奏で日生劇場でのリサイタルで大変困ったことがありましたが、そのときは始めて日本で光化学スモッグの発生した年で、外に出ると凄く多くの痰が出て困ったのです。今はそのときほど空気が悪いとは思わないのですが、矢張り空気の状態が悪化しているのでしょうか？地球環境を守るためにはまず日本、東京の空気を良くすることですね。ヒートアイランド現象も起こしては駄目なのですが、自民党では企業献金に左右されて、我々にはなんら恩恵は無くなってしまいうのですから、お先真っ暗です。税金も数倍高くなりました。

また脱線してしまいましたが、音楽に戻ります。

Unbewegte laue Luft,
Tiefe Ruhe der Natur;
Durch die stille Gartennacht
Plätschert die Fontaine nur.
Aber im Gemüte schwillt
Heißere Begierde mir,
Aber in der Ader quillt
Leben und verlangt nach Leben.
Sollten nicht auch deine Brust
Sehnlichere Wünsche heben?
Sollte meiner Seele Ruf
Nicht die deine tief durchbeben?
Leise mit dem Ätherfuß
Säume nicht, daher zu schweben!
Komm, o komm, damit wir uns
Himmlische Genüge geben!

風もそよがぬ、和やかな大気、
自然の深い安らかさ、
ひっそりした夜更けの庭に
噴水の音のみ聞こえている。
だが、わたしの心の中では
激しい熱望が高まり、
血管の中で生命がたぎって、
生命を求めている。
あなたの胸もそれに劣らず、
焦がれる想いを湧きたたせてはいまいか？
わたしの心の叫びに応えて、
きみの心を動かさずにはいられまいか？
ひめやかに、足どりも軽く、
訪なうことをためらいたまうな！
この世ならぬ満足を頌ちあうため、
来たまえ、おお、来たまえ！

1959年1月のヴィーンでの最初にリサイタルにも歌った曲なのでとても懐かしい歌です。

1898年にSimrock社から出版された „Brahms=Texte vollständige Sammlung der von Johannes Brahms komponierten und musikalisch bearbeiteten Dichtungen“ herausgegeben von Dr. G. Ophüls (参考資料 5) という書籍があり、ブラームスが作曲した声楽曲のテキストを網羅したものです。シューベルトにもありますし、他にもプフィッツナーやシュトラウスの本も持っています。

5番目の歌が „Schwermut“ (憂鬱) です。Candidus(カンディドゥス 1817-1872)の詩で、彼は牧師職の子孫としてシュトラースブルグ近郊の町に生まれ、1858年以降はオデッサの新教の牧師となりました。彼は思想的な抒情詩人であり、また宗教哲学者でもありました。

Mir ist so weh ums Herz,	僕の胸は苦しくて
Mir ist als ob weinen	泣きたいようだ
Möchte vor Schmerz!	苦痛のあまりに!
Gedankensatt und lebensmatt	考えあぐね、生活に疲れはて
Möchte ich das Haupt hinlegen	頭を突っ込みたいほどだ
In der Nacht der Nächte!	常夜の暗闇の中に!

ブラームスは「歓喜する事を知らない!」とか「憂鬱で暗い!」と言うような、悪意と言って良いほどのイメージを植えつけられた作曲家ですが、決して北ドイツの典型的な気質を背負っているとは思いません。勿論北ドイツ人全部がそうであるわけは無いのですし、ブラームスの作品の殆どがそうだと言うわけでもないのです。この歌はどちらかと言うと少し暗いイメージはありますが、特別に気になるほど暗いことは無いと思います。彼は詩によっていろいろな感情の歌を作曲しています。詩の選び方には作曲家の個性、文学性が出るでしょうが、ブラームスが一方的に、そのような言われ方をするとすると、僕はどのように言われるのでしょうか。ある一面を捉えてレッテルを貼ることの好きな日本人、マスコミは本当に恐ろしいことです。スポーツ選手は可哀想だと思います。プレッシャーに気づかされているようにも感じます。

作品 59 の 1 „Dämmerung senkte sich von oben“ は数少ないゲーテの詩に附曲した歌で、僕はとてもよい歌だと思っていますし、リサイタルなどで何度も歌った歌です。

軽い夕靄が上の方から沈んできたり、軽く浮いてきたり、夜の帳が静かに垂れ下がってくる情景を前奏で表現しています。ブラームスの詩の選び方は、後世に名を残している、所謂大詩人と称されている詩人の詩への附曲は極めて少なく、当時の流行詩人の詩がとても多いのです。彼ほどゲーテの詩に少なく作曲した作曲家は他に誰がいるのでしょうか。シューベルトでもシューマンでもヴォルフでも非常に多くのゲーテの詩に作曲しています。しかしブラームスはたったの 5, 6 曲しか作曲していないので、この歌は貴重です。

Dämmerung senkte sich von oben,	夕靄は垂れ込めて
Schon ist alle Nähe fern,	すでに間近も遠方も
Doch zuerst emporgehoben	宵の星が上がってきて
Holden Lichts der Abendstern.	穏やかな光を放つ
Alles schwankt ins Ungewisse,	何もかもおぼろの揺らぎ
Nebel schleichen in die Höh,	霧は這うようにのぼり
Schwarzvertiefte Finsternisse	暗く奥深い夜空を
Widerspiegelnd ruht der See.	湖面は静かに映し出す

Nun am östlichen Bereiche	いま東の空の辺りに
Ahn ich Mondenglanz und Glut,	月の上る気配があり
Schlanker Weiden Haargezweige	柳の髪のような枝は
Scherzen auf der nächsten Flut.	間近な川面に戯れる
Durch bewegter Schatten Spiele	揺れ動く枝の影の間に
Zittert Lunas Zauberschein,	妙なる月影がゆらぎ
Und durchs Auge schleicht die Kühle	爽やかさが目から心へ
Sänftigend ins Herz hinein.	なごやかにしみわたる

僕がお付き合い願った伴奏者の名前を上げると、外人伴奏者だけで Gerald Moore, Erik Werba, Günther Weißenborn, Geoffrey Parsons, Hermann Reutter, Paul Hamburger, van Blerk, Michel Isador, Lennart Rönnlund, Max Jost, Graham Johnson, Hartmut Höll, Christian de Bruyn さんたちです。(忘れてる人もいます) 先日空港爆破のあったグラスゴーでのリサイタルとBBCのオーディションで弾いてもらったベンジャミン・ブリッテン氏の友人で女性の伴奏者の名前は失念してしまいました。とても男勝りの伴奏を弾き、気持ち良く歌えたのですが。

それらの伴奏者との思い出を話すだけでも何時間もかかってしまうと思いますが、非常に勉強になった人や、伴奏者としては殆ど素人に近い状態から驚くほど進歩した人など色々な経験をしました。

この曲をムーアさんやヴェルバさん、ロイターさんに弾いて貰ったら、どんな弾き方をしたのだろうかと思ってしまう。

2番目が „Auf dem See“ 「湖上にて」(ジムロック)です。ヴォルフのメーリケ歌曲集の中に「男の子とミツバチ」と言う歌があり、冒頭に「ブドウ畑の高みにあずまやが立っている、入口も窓も無く・・・」と歌い出しますが、その情景がヴィーン近郊で、ヴォルフがたくさんの歌曲を作曲したヴォルフの友人ヴェルナーさんの別荘のあるペルヒトルドスドルフの庭と偶然の一致で、メーリケが来たことがあるのではないかと思いたくなるほど、全く同じ情景なのです。

この詩「湖上にて」の情景はオーストリアは勿論のこと南ドイツでも似た情景は何箇所もあるのでないでしょうか？僕は Zell am See とか Erlafsee を直ぐ思い出します。Erlafsee (マイアホーファー) はシューベルトが作曲しています。

Blauer Himmel, blaue Wogen,	青い空、青い波
Rebenhügel um den See,	湖水を巡るブドウ畑
Drüber blauer Berge Bogen	かなたには白雪をいただいた
Schimmernd weiß im reinen Schnee.	きらめく青い山なみ。

Wie der Kahn uns hebt und wieget	小舟は波にのって揺れ
Leichter Nebel steigt und fällt,	淡い霧は立ち上ったり下がったり
Süßer Himmelsfriede lieget	快い天国のような平和が
Über der beglänzte Welt.	輝いている世界を包む。

Stürmend Herz, tu auf die Augen,	荒れ狂う心よ、目をひらけ
Sieh umher und werde mild:	周りを眺めて鎮まるのだ
Glück und Frieden magst du saugen	幸せと安らぎを吸い込むが良い
Aus des Doppelhimmels Bild.	頭上と水面の二つの空から。

Spiegelnd sieh die Flut erwidern
Turm und Hügel, Busch, und Stadt,
Also spiegle du in Liedern,
Was die Erde Schönstes hat.

湖面が写してこたえる
塔や丘、茂みや街を見よ
さあ、歌の中に映しだすが良い
世界になんと美しいものがあるかを。

この歌を勉強したのはヴィーン留学中ですが、どうしても思ったように表現できませんでしたので、好きな歌でしたが、あまり歌っていませんでした。しかし生徒には良く歌わせるのですが、僕が歌えなかったほど苦勞する生徒はいないので、不思議な歌に感じてしまうのです。相性なのでしょうか？

自然の美しさの描写と自分の心の葛藤に対する語りかけ。変化に富んだ、とても綺麗な歌です。

3番目が有名な „Regenlied“ 「雨の歌」です。この詩と次に続く4番目 „Nachklang“ 「名残り」の詩はクラウス・グロート (Klaus Groth) のものです。この2曲のメロディーは同じです。

Max Friedlaender 著の Brahms' Lieder Einführung in seine Gesänge für eine und zwei Stimmen 1922年出版 (参考資料6) には Eine Nachklang des Regenliedes, mit der gleichen Melodie beginnend, . . . と記されているように „名残り” は「雨の歌」の余韻、残響で「雨の歌」と同じメロディーで始まり、変化していくことで苦しみ表現を高めている。“とありますので、先ず Regenlied を全部ではなく、少し触れる程度、最初から4節までと最後の8節を歌ってみます。

Walle, Regen, walle nieder,
Wecke mir die Träume wieder,
Die ich in der Kindheit träumte,
Wenn das Naß im Sande schäumte.

降れ、雨よ、降り注げ
僕のあの夢をまた呼び戻せ
幼い日にみたあの夢を
雨水が砂地にあわ立った時にみた。

Wenn die matte Sommerschwüle
Lässig stritt mit frischer Kühle,
Und die blanken Blätter tauten,
Und die Saaten dunkler blauten.

けだるい夏の蒸し暑さが
爽やかな涼しさと競い
つややかな木の葉は露に濡れ
田畑の緑が色濃くなった時。

Welche Wonne, in dem Fließen
Dann zu stehn mit nackten Füßen,
An dem Grase hinzustreifen
Und den Schaum mit Händen greifen,

なんと楽しかったことか、流れの中に
裸足でそこに立ったり
草を軽く手で触れたり
両手で泡をすくったりしたことは

Oder mit den heißen Wangen
Kalte Tropfen aufzufangen,
Und den neuerwachten Düften
Seine Kinderbrust zu lüften !

あるいはほてった頬に
冷たい雨に雫をあてたり
新たに立ち昇る香気を吸って
幼い胸を膨らませたりしたことは！

・
・
・

・
・
・

Möchte ihnen wieder lauschen,
Ihren süßen, feuchten Rauschen,
Meine Seele sanft betauen

あの雨の音に快い、しっとりした
雨だれに音に耳をすまし
あどけない幼心のおののきで

Mit dem frommen Kindergrauen. 僕の魂を静かに潤したいものだが
次の4番目に続くのが „Nachklang“ 「名残り」で同じメロディーで始まりますので、お聴きください。

Regentropfen aus den Bäumen 雨の雫が木々から
Fallen in das grüne Gras, 緑の草原に滴り落ち
Tränen meiner trüben Augen 悲しみに曇る目の涙が
Machen mir die Wange naß. 僕の頬を濡らす。

Wenn die Sonne wieder scheint, 太陽が再び照り輝く時
Wird der Rasen doppelt grün: 芝生の緑は倍加する
Doppelt wird auf meinen Wangen 僕の頬の熱い涙も
Mir die heiße Träne glühn. 倍加して燃えるだろう。

如何ですか？メロディーの共通点は良くご理解いただけたと思います。

8番目が „Dein blaues Auge“ 「君の青い目は」(グロート)です。

この歌も非常に知られた歌で、結構良くコンサートで歌いました。

Dein blaues Auge hält so still, 君の青い目は静かに湛えている
Ich blicke bis zum Grund. 僕はその奥底まで覗きこむ
Du fragst mich, was ich sehen will? きみは僕がなにを見ようとするか尋ねる
Ich sehe mich gesund. 僕は元気な自分を見ているのだ

Es brannte mich ein glühend Paar, 燃えるような二つの瞳が僕を焦がし
Noch schmerzt das Nachgefühl: その名残りがなおこの胸を痛める
Das deine ist wie See so klar, きみの瞳は澄んだ湖のようだが
Und wie ein See so kühl. また湖さながらに冷たいのだ

この歌をドイツでアンコールに歌ったときの話をします。もう40何年も前のことですが、日本流の中高生を対象に歌った時のことです。アンコールに „Dein blaues Auge“ を歌いますと言ったとたんに、大爆笑なのです。きょとんとしましたが、歌い終えて拍手をしてもらい、楽屋の戻ってその時の伴奏者 Rainer Hoffmann になぜ笑ったのか聞きました。実は blaues Auge (青い目)とは殴られたり、ぶつかったりして出来た「あざ」のことも「青い目(あざ)」で、「お前の青いあざ」と言ったわけでした。それで笑ったと言うことでした。「ところ変われば、品代わる」と言いますが色々な表現があるものです。

作品63の5は „Junge lieder I“ „Meine Liebe ist grün“ 「僕の恋は緑だ」です。

この詩は Felix Schumann, Robert と Clara の息子でブラームスが名付け親、の詩で18才の Felix が詩を書いた直ぐに Clara はブラームスに手紙を書き、詩を送っています。ブラームスは楽譜と共に1873年12月24日にクララ宛に手紙を書いています。残念なことにクララ・シューマンとヨハネス・ブラームスの往復書簡集をどこかにしまいこんでしまい、見つかりません。折角貴重な書籍(書簡集)を買い込んでも、必要な時に使えないのでは意味が無いですね。積読(つんどく)の意味も無いです

ね。いずれ出てきたら詳しく説明いたします。先ず歌ってみます。次の6番目も **Felix** の詩です。

Meine Liebe ist grün wie der Fliederbusch, Und mein Lieb' ist schön wie die Sonne; Die glänzt wohl herab auf den Fliederbusch Und füllt ihn mit Duft und mit Wonne.	僕の恋はライラックの茂みのように緑だ そして僕の恋は太陽のように美しい ライラックの茂みの上にその光をそそぎ 芳香と歓喜で満たす
--	---

Meine Seele hat Schwingen der Nachtigall Und wiegt sich in blühendem Flieder, Und jauchzet und singet von Duft berauscht Viel liebestrunkene Lieder.	僕の魂はナイチンゲールのように翼をはり 咲き薫ライラックの中で身をゆすぶり 歓喜をあげ甘い香りにうっとりして 恋に酔いしれる歌の数々を歌うのだ
---	--

かなり激情的な歌に作曲していると思いますが、皆さんはどのように感じましたか？この曲の間奏は7小節目の *f* の後に自筆楽譜（参考資料7）ではデクレッシェンドの松葉印があります。しかし伴奏の音形には違いがありますので、単純には論評できないのですが、全集（参考資料8）をはじめ印刷楽譜では全ての楽譜でこの松葉印が抜けています。これを弾き比べてもらいます。僕はデクレッシェンドがある方が自然に感じます。decresc. が無くともあるように弾く人はいるでしょうが、あった方が安心して弾けるともいえるでしょう。何処で抜けてしまったのでしょうか？

8番目が „**Heimweh**“ 「郷愁」です。

„Die (Grothschen) Gedichte sind herrlich“, 「この（グロートの）詩は素晴らしい！」とビルロートがブラームス宛に書いています。

とても綺麗な歌ですので、先ずお聴きください！

O wüßt' ich doch den Weg zurück, Den lieben Weg zum Kinderland ! O warum sucht' ich nach dem Glück Und ließ der Mutter Hand?	おお、道を引き返すことができるのなら こどもの国へ行くあの懐かしい道を！ おお、なぜ僕は幸を求めて 母の手から離れていったのだろう
---	--

O wie mich sehnet auszuruh'n, Von keinem Streben aufgeweckt, Die müden Augen zuzutun, Von Liebe sanft bedeckt.	おお、僕はなんと安らぎを渴望していることか 衝動に駆られることなく 疲れた目を閉じることを 愛にやさしく包まれて
---	---

Und nichts zu forschen, nichts zu spä'h'n, Und nur zu träumen leicht und lind; Der Zeiten Wandel nicht zu seh'n, Zum zweiten Mal ein Kind !	何も極めず、何も探らない ただ気楽で、穏やかに夢見ながら 時代の変遷に心を煩わされず もう一度子供に戻りたいのだ
--	---

O zeigt mir doch den Weg zurück, Den lieben Weg zum Kinderland ! Vergebens such' ich nach dem Glück, Ringsum ist öder Strand !	おお、私に引き返す道を教えてくれ こどもの国へ行くあの懐かしい道を！ 幸を求めても何の甲斐もなく 周り全ては荒涼たる砂浜なのだ！
---	---

この歌もとても好きなブラームスの歌曲の一つです。

作品 70 の 2 „**Lerchengesang**“ 「ひばりの囀り」を歌います。良くお聴きください。

Ätherische ferne Stimmen,	遠い空の彼方からの囀り
Der Lerchen himmlische Grüße,	ひばりたちの空からの挨拶
Wie regt ihr mir so süße	愛らしい歌声よ、おまえたちは
Die Brust, ihr lieblichen Stimmen !	なんと快く僕の胸に響くことか！
Ich schließe leis mein Auge,	僕がそっと眼をつぶると
Da ziehn Erinnerungen,	瞼の中の穏やかな薄明かりの中を
In sanften Dämmerungen,	さまざまな思い出がよぎってゆく
Durchweht vom Frühlingshauche.	春風に包まれながら

「勉強しろ！練習しろ！そうしないと批評家にしかなれないぞ！」と口癖に言っていたベルリン音大のチェロの先生がいたそうです。彼の生徒の一人で批評家になった人がいて、ヴァイセンボルン先生が伴奏を弾いた「リート夕べ」でドヴォルザークの「ツイゴイナーの歌」全 7 曲 Op. 55 を聴いて批評を書きました。この 4 番目の曲は伴奏が 8 分の 6 で歌は 4 分の 2 です。(参考資料 9) 当然のこと歌とピアノのリズムにずれが生じますが、この批評家が「とてもよい演奏であったが 1 曲だけ歌と伴奏が終始ずれた演奏があり、残念だった。」と新聞に批評を掲載したそうです。楽譜を一度でも見ていれば、こんな馬鹿は書かなかったでしょう。不勉強は一生付きまとうのでしょうか。桑原！桑原！ですね。

この歌でピアノと歌がずれた感じを持った方は多いと思います。ブラームスのこの曲(参考資料 10)は譜面上ではアラブレーヴェ(2 分の 2)ですが、歌のメロディーは 3 連音譜ですので、ピアノは 4 つの音符に対して歌は 3 つと言うことになります。

このような扱いは多くの作曲家がしますが、ブラームスはかなり多く使う作曲手法です。

作品 71 の 3 は „**Geheimnis**“ 「秘め事」カンディドゥスの詩です。僕の好きな歌ですので、お聴きください！

O frühlings-Abenddämmerung !	おお、春のたそがれよ！
O laues, lindes Wehn !	おお、温かいそよ風よ！
Ihr Blütenbäume, sprecht, was tut	花咲く木々よ、話しておくれ
Ihr so zusammenstehn?	なぜお前たちが寄り添っているのか？
Vertraut ihr das Geheimnis euch	お前たちは僕らの甘い愛について
Von unsrer Liebe süß?	秘め事を打ち明けてあっているのか
Was flüstert ihr einander zu	お前たちは僕らの甘い愛について
Von unsrer Liebe süß?	何を囁き合っているのか？

この歌は詩もきれいですが、曲もなかなか良い歌だと思いませんか？

5 は „**Minnelied**“ 「愛の歌」ヘルティの詩です。典型的なテノールの歌と言えるでしょう。非常に有名な歌です。

とりあえずこの歌を聴いてください。

Holder klingt der Vogelsang,
Wenn die Engelreine,
Die mein Jünglingsherz bezwang,
Wandelt durch die Haine.

鳥の歌がいつそう美しく響く
天使のように清らかな人が
僕の青春の心を奪った
その森の中をさまよう時に

Röter blühen Tal und Au,
Grüner wird der Wasen,
Wo die Finger meiner Frau
Maienblumen lasen.

谷や野の花はいつそう赤く
芝生はいつそう青々となる
そこで僕のいとしい人の指が
すずらんを摘んだところでは

Ohne sie ist alles tot,
Welk sind Blüt' und Kräuter ;
Und kein Frühlingsabendrot
Dünkt mir schön und heiter.

あの人なしでは全て死んだも同然
花や草も枯れ果てて
そして春の夕映えさえも
僕には美しくも楽しくも思えないのだ

Traute minnigliche Frau,
Wollest nimmer fliehen,
Daß mein Herz, gleich dieser Au,
Mög' in Wonne blühen !

親愛な、恋人よ
決して僕を見捨てないでくれ
この野さながらに、僕の心にも
喚起の花が咲きでるように

如何でしたか？バリトンではなくテノールで聴きたいと思われませんでしたか？

今回はこの歌で終わりにしますが、ブラームスの歌曲にも良い歌が沢山あります。ブラームス歌曲の最後は作品番号 121 の「四つの厳粛な歌」ですので、今日までに作品 71 までしか歌っていません。これでは彼の歌曲の全貌は示すことが出来ませんでした。彼の歌曲の大まかな所は聴いていただけだと思います。

僕が最初のブラームスの歌曲に接したのは、音大の 2 年で、ヘッサート先生に主科の先生が変わった時でした。1 年間ブラームスばかりを勉強しました。

個人的な見解ですが、リート作曲家と言えばシューベルトとヴォルフ、次の続くのがシューマンでしょう。そしてブラームスと僕は思っています。勿論プフィツナー、R. シュトラウスなど多くの作曲家の作品があります。歌ってみたい作品も数限りが無いでしょうが、年齢とともに色々制約が多くなり歌いきれない曲も増えていると思います。

今日はこれで終わりといたしますが、今日のレクチュア・コンサートで疑問、質問がありましたらどうぞ！

もし疑問、質問が無ければこれで終りに致します。

実は明日 10 時に整形外科に入院し、8 月 2 日に右股関節の手術をします。人工関節と取り替えることにし、1 ヶ月入院生活を余儀なくされてしまいました。

10 月 30 日には札幌のキタラ小ホールでリサイタルが北海道ヴォルフ協会の主催で計画されていますので、それを万全にして、無事に終わることが第一ですので、それ以外の予定はまだ考える余地がありません。いずれ計画をしまった折には、またお知らせいたします。今までの 5 年間 レクチュア・コンサートに関わってくださった皆々様に心からの御礼を申し上げます。色々有り難うございました。